

# 楷

No.3 December 1986

## 農業生物研究所分館について

農業生物研究所分館長 八木正一

農業生物研究所分館は、農業生物研究所の前身の大原農業研究所の図書館を引き継いだもので、日本における農学に関する図書館としては最も充実したものの一つといわれている。

大正10年(1921)農業研究所員の研究促進、農業の発展に寄与するため今日から見るとちょっと風変わりなコンクリート煉瓦建延310㎡の書庫と木造平屋建60㎡の閲覧室、それに製本室を併置した図書館として発足した。昭和27年(1952)農業生物研究所と共に岡山大学に移管されたが、その際に故大原総一郎氏の篤志寄付により鉄筋コンクリート3階建延167㎡の書庫が増築され、閲覧室(48㎡)、事務室(68㎡)の増改築が行われた。その後昭和47年(1972)増加する図書資料の収容が不能となったので、拡充と併せて、耐震・耐火等貴重な文献の保管を完全にするため、新しく4層延652㎡の書庫を新築し現在に至っている。

蔵書のうち特記すべきものは、ドイツの元ライプチヒ大学植物学教授ペッファー博士の全蔵書11,730冊(ペッファー文庫)と中国の農業及び植物に関する漢籍4,884冊(大原漢籍文庫)である。

ペッファーはドイツの植物生理学者で細胞膜の浸透圧の研究で新時代を開いた人である。京都大学名誉教授上野益三博士は雑誌「遺伝」にペッファー文庫紹介の一文を寄せている(1978)。そのなかで「その師というべきユリウス・ザックスが基礎を固めた植物生理学を、いっそう近代的な自然科学に育て上げた傑出した科学者である」と述べている。Encyclopaedia Britannicaにはペッファー36才の著書 Pflanzenphysiologie. Ein Handbuch des Stoffwechsels und Kraftwechsels in der Pflanze. (1881)が重要な教科書として長年用いられたことを挙げているが、その改訂(1901~04)に備えて、大型特製初版本の広い余白に毎ページ、ペッファー自らが改訂文をぎっしり書き込んだ記念すべき珍しい本が文庫にある。また、進化論のチャールズ・ダーウィンが自著の The Power of Movement in Plants. (1880)に自らペッファーへの献辞を記した珍しいものもある。この文庫の価値について上野博士が次のように述べているが、同感である。「植物生理学のような進歩のテンポが速い自然科学のために、1920年までのこの集書がその期待(購入時の)にいつまでも十分に答え得たとは考えにくい。・ ・ ・特に日本ではペッファーの学統によって植物生理学はその緒についたのであるから、日本における植物の根源を探るためにこの文庫の史料としての価値は倍加する。」なお、「平凡社大百科事典」の項に「ペッファーの収集した文献約1万点が岡山大学農業生物研究所図書館に〈ペッファー文庫〉として所蔵されている」と紹介している。

大原漢籍文庫には明版の農政全書がある。我国で単行の版本としての最初の農書である農業全書(16

## 目

## 次

- |  |                                       |
|--|---------------------------------------|
| ・ 農業生物研究所分館について……………1                    | ・ 18世紀~20世紀初頭フランス社会経済政治思想コレクション……………5 |
| ・ 図書館雑感……………2                            | ・ IFLAに参加して……………6                     |
| ・ 論文作成のために図書館を<br>どう利用するか?—人文編—……………3    | ・ 係の紹介 相互協力係……………7                    |
| ・ 二次資料・オンライン文献検索指導<br>——— 鹿田分館における……………4 | ・ 図書館統計……………8                         |
|  | ・ 日誌・その他……………8                        |

97) は、内容的には農政全書の強い影響を受けたものである。従って、我国の農学の根源を探る上で大いに意義があるものと考えられる。

蔵書のなかで、最も古いものはボローニャ大学の医学教授になったマルチェッロ・マルピーギの全集 (Opera omnia) である。1687年のライデン版である。また、100年ばかり前に出版された植物図鑑 Physiotypia Plantarum Austriacarum は写真と違って手書の精密なもので眺めているだけでも楽しい。

ところで、現在の分館図書の特徴の一つは研究所構成の分野の幅が広いところから、農業生物に関し、遺伝、細胞から個体群、更に公害関係まで広く雑誌を集めているところにあるかと思われる。外部からの文献複写依頼が、研究所から外部に依頼するものの3倍を越えていることがそれを証明しており、研究所内、更に岡山大学内にとどまらず広く全国的に利用されていることを意味している。

今、分館にとっての問題点は、閲覧室・事務所の建物が木造で34年を経過し軒のモルタルが落ちるなど、傷みがひどくなっていることと、書庫をはみだした図書などで閲覧室が狭くなり、静かに勉強できる雰囲気でないことである。そのため、ここ数年改築をお願いしている。それともう一点は、貴重文書をいかに有効に利用されやすい形態で、しかも傷まないよう保存するかを研究中である。

(やぎ まさかず 農業生物研究所 教授)

## 図 書 館 雑 感

山下 隆 弘

私は当大学に来たばかりであり、岡山大の図書館に初めて足を運んだのは、この4月の中頃であったと思う。その時は、自分の専門分野の本がどの位どの様に備えられているのかを見るためであった。案内をしてくれた図書館の係の人が、「どうですか」と心配顔に尋ねた。私は無遠慮に「ひどいもんです」と答えてしまった。その時、彼は非常に悲しそうな顔をした。私は岡山大では私の講座の歴史が全くないと言ってよい程であるから当然の事というか、しかたのない事でしょうという様な事を言って、その場を退散した。その後何回か図書館を訪ねた。私が当大学の図書館に不慣れな事もあって、図書館の人々に、ずいぶんとわずらわしい思いをさせ、お世話になった。図書館の人々は、極めて好意的である。探していた本が見つかり、彼等は、私以上に嬉しそうな顔をして、「また来て下さい」といってくれたりする。上に述べた私の専門領域の当大学における事情によって研究上必要な統計、雑誌、書籍のあるものは当図書館になく、通常のルーチンでない形で、その所在を、当市内、更には全国的なレベルで探索し、入手・借り入れの努力をしてくれた。例えば、ある資料は県庁から入手し、もう一度は京大図書館から借り出しをして貰った。それらを実に快く、親切にしてくれ、嬉しいものである。

図書館というものについて、人々は夫々いろいろなイメージを持つが、それは人間が知識・情報を伝承してゆくしくみの1つであり、そのためのいろいろな機能をもったシステムであるといえる。

システムと言うとき、どの様な働きをもつシステムがどの様に統合されていて全体としてどの様な機能・能力をもち、その能力がどの様に有効に働いているかが問題となる。ここでは、図書館側のもつ能力と、それを利用する利用者側のありかたの双方が問題となる。当面、図書館側について見てみると、そのありかた、すなわち、どのシステムの働きをどの様にするかは図書館によって相当の違いがある。

典型的な例をあげると、蔵書数第一主義で、それが多ければ多い程すぐれた図書館であるという考えであり、それは時として世界で数少ない貴重本を持つ事を誇りにする博物館志向と結びつくものである。これに対して、アメリカンセンターのとっている姿勢は、問題とすべき最新の図書の選別・貸出しを中心にして二年、三年前のものはほとんど廃棄してゆくシステムをとっている。大学図書館に限定しても、カリフォルニア大バークレイ校では、今もそうだと思うが、各授業課目毎に単位をとるために読まなければならない本が何冊もあり、それらをすべて10冊とか20冊といった冊数で図書館に備えていて、学生はそれらの本を借り出しては読み、借り出しては読みして少なくとも毎週の様子に図書館に足を運んでいるのを見て、感心した事がある。それは実に教育産業のベルトコンベアを思わせるものであったが、そこで働いている係の人も機械的で人間味が乏しいと感じた。学生の図書館利用面を別の形で重点的にして感心させられたのはストックホルム大学のそれで

ある。講義棟や他学部との建物自体の関係もさることながら、システムとして開架図書が非常に豊富で、一般市民に対して迄も極めてオープンにしている。岡山大図書館はわが国の大学図書館の中では非常にオープンな方だと思う。少なくとも私のよく知っている図書館よりははるかにオープンである。

以上の数少ない例でもわかる様に図書館が蔵書数のみを誇るのは問題である。特に、学術情報ネットワークが東大等4大学間では今年中に完成され、岡山大を含む11大学間でも間もなく実現されようとしていて、更にそれが完成すると図書資料約11億4千万冊、雑誌190万種について、その所在

内容の検索が瞬時で可能となるという。この事情の下では、蔵書数の多寡はあまり問題でなくなる。

利用者側については、岡山大学の学生諸君1人1人が、図書館とのかかわりあいを持たないよりは持った方が良く、更に欲を言えば読書を通じてすばらしい知的な興奮を経験して欲しいと思う。この利用者側の問題を別にして言うと、図書館運営においてコンピューターが益々大きな役割をしめるようになって来ている今日、図書館の優劣は勿論その蔵書数でなくて、館員が利用者の喜びを喜びとする人間的な人間であるか否かによって決まると思う。そして、その条件を岡山大図書館は具えているようである。

(やました たかひろ 経済学部 教授)

## 論文作成のために図書館をどう利用するか？—人文編—

赤羽 学

卒業論文は、大学院に進んで学問を続ける人にとっては、その学問の出発となるが、卒業して実社会に出る大部分の諸君にとっては、学問の仕納めとなる。卒論は書かなければ卒業できないから、とにかく書く。そういう態度で接すると、卒論は上から強制された苦痛なものとなる。文学部で卒論を課するのは、大学は学問をすところだから、卒業時には、少なくとも学問的な作業をさせるという建前の外に、物の事実を知る、あるいは、そのための段取りを知るという教育的な配慮があるのである。すべて上からの押しつけで人生を送る人にとっては、自分独自の世界は開けない。卒論はその意味で自分の力で自分の世界を切り開く試練の場なのである。

ところがその卒論が往々にして人の受け売りとなる。学生の扱うテーマは、すでに幾多の先人が研究成果をあげていて、それらを踏まえなければ一歩も先へ進めない。そこで参考文献を読み、その説に従って進もうとするが、知識に乏しい学生の能力では、その説の枠を出ることができず、悪くすると、その説の丸写しになってしまう。そうした場合一つの打開策としては、たとえ先人の説の外に出られなくとも、その人の引いた文献をもう一度原典に当たって調べ直し、果してそのとおりであるかどうか再点検してみることである。そうすると必ずその人の誤りや調査不十分の所が見つかって、そこから新しい見解が生れてくる。ともかく作品を原典に当たって読むという基礎作業が必要である。

国文学の場合、色々な注釈書や校注本が存在するが、なるべくなまの資料を用いることが望ましい。なまじ注釈がついていると、それに支配されて新しい発想をするための障害となる。原資料の所在を確かめるには、岩波書店から出ている『国書総目録』を引くといい。そこに資料の所在が記されており、活字化された文献の目録も出ている。図書館には、利用度の多いもの、基本的なものは備えてあるが、特殊なものはない場合がある。そんな時は、参考調査係に相談し、所在をたしかめて、直接出向いて調べたり、写真やコピーで取り寄せたりする。くれぐれも注意すべきは、決して先行論文の孫引きをしない、たとい人が引いていても、あらためて原典に当たって引くということである。かつて古代の論文で、『続日本紀』が引いてあるので、『続日本紀』が何に入っているかと聞いてみたら、群書類従に入っているという答えがもどってきてびっくりしたことがある。この人は、『続日本紀』を原典から引かないで古代研究をしていたのである。

次に作品解釈の方法について述べる。日本語で書かれた文献は、大抵は理解できるとみんな思い込んでいる。しかし、決してさにあらずである。本当の意味をよくよく考えてみることである。その場合辞書を利用するとよいが、辞書の意味を丸呑みにするのではなく、そのもとになった用例を原典に当たって吟味することが必要である。更に自分で同趣の例を探し、多くの例を帰納することによって、正しい意味をつかむ操作をしなければな

らない。現在は沢山の索引があって、それを引くとかかなりの用例を集めることができる。個々の索引の外に、『広文庫』とか『古事類苑』とか『叢書索引』とか、図書館には大型の索引が備わっているので、早くその引き方を会得して利用するといいい。『日本古典文学大系』にも索引が2冊ついているし、個人全集でも『柳田国男全集』の最終巻は索引で便利である。『校本芭蕉全集』も第10巻が索引である。索引ができると、読まないで必要な語彙を引き出してそれで論文を書くという横着もできる。そうしたことは極力自戒し、自分で作品を読むという努力をしなければならない。

更に研究文献の調査はどうするかについて書いておく。研究文献は、文学辞典や雑誌の特集に大抵集められているので、それを利用するといいいが、

大掛りに調べようと思ったら、『雑誌記事索引』を引くことである。図書館にない文献を取り寄せる時は、それが雑誌ならその部分のみならず、目次と奥付も合せて取り寄せることである。その文の周辺の文を知ることも大いに有益である。奥付は、正確な発表年月の確認のために必須である。

卒論は、その内容もさることながら、基礎的な作業ができていないとよい評価は与えられない。それは個人の達成度である。自主性のない人はえてして、他人によりかかった論文を書く。考えの浅い人は浅い論文を書く。自分勝手な人は勝手な論をばく。十分な基礎調査をし、正確な解釈を施して的確な結論を導く。これが判断力のある論文である。これは学問をするしないにかかわらず、人間の成長にとって欠くべからざることである。

(あかはね まなぶ 文学部 教授)

## 二次資料・オンライン文献検索指導 —— 鹿田分館における

自然科学の分野では、昔から、学術雑誌論文により、新しい情報の伝達を行うという仕組みが比較的良く整っている。そこで、近年のこうした文献の急激な増加に対処して必要な情報を探したり、数多くの文献を読んで学問分野の進歩に遅れないように努力する必要から、雑誌論文を主な対象とした、抄録誌や索引誌が発達した。

医学分野は、化学の分野と共に、この自然科学諸分野の中では最も良く、これらの二次資料(Index Medicus, Excepta Medica, 医学中央雑誌など)が発達し、大切な文献情報源となっている。ちなみに文部省の調査における、索引誌および抄録誌の利用は、理学系、工学系、農学系などに比べて医学系の使用率が一番高く、「常に利用する」と「時々利用する」の両者を併せて、索引誌で80%、抄録誌で92%となっている。(注)

また、最近のように、医学医療分野での情報サービスが複雑になり、多様化してくると、これを利用する者にとっては、①まずその存在を知ること、と共に、②実際の使用法を学ぶこと、が必要になってくる。

鹿田分館においては、こうした利用者へのサービスの重要性を考慮して、昭和40年頃から、大学院生に Index Medicus の索き方を教え始めた。当初は、分館長のご配慮で、解剖学の授業をいただいていたが、大学院セミナー(春・夏季)の制度ができると、そのカリキュラムの中に正式に組込まれ、文献利用指導として定着した。しかしながら、近年は医学文献の質的・量的増大によ

り、手作業で文献を探すことに加えて、各種医学データベースをオンライン文献検索で行う方法が日常化している。そこで、昭和60年度から、参考調査係が担当し、分館長の御理解と大学院委員会のご支援のもとで、下記の内容で実施している。

昭和61年度 大学院春季セミナー講義

(担当 図書館)

(題目) 図書館の利用法と文献の探し方

～ Index Medicus, 医学中央雑誌,  
およびオンライン文献検索～

(2時間30分)

(内容)

1. 医学図書館における二次資料について
2. Index Medicus の使い方
3. 医学中央雑誌の使い方
4. オンライン文献検索とは、何か
5. Medline によるオンライン文献検索

(実習)

出席者 30名(医学研究科定員51名)

今後の参考に、本年は、講義のあとでアンケートをとってみた。オンライン文献検索は、実習時の院生の様子でかなり興味を持っていることが感じられたが、二次資料の講義については、まだまだ工夫の余地がありそうである。(回答率 80.3%)できれば、小人数のグループを対象に、例題を用いて実際に Index Medicus を索いてみるといった実習をとり入れる方法も効果的であろう。アンケートにもそうした希望がでている。オンライン文献検索も、もっと小人数でたびたび実施する

機会を設けることができれば、利用者の理解も深まる。そのためには、多少の予算措置も必要となるが、オンライン文献検索への基本的知識についての理解が学内に広がっていくならば、サーチャーたる図書館担当者もよい検索ができることにつながり、その恩恵は両者にとって測り知れないと思われる。

やがては、大学院生のみならず、医局員、研修医および医療技術者といった多くの鹿田分館の利用者の皆様に、図書館が、文献全般の相談相手として役立てる、よき図書館サービスの充実、向上を計りたいと願っている。

(注) 科学技術活動の現状と展望 第2巻 医学情報  
科学技術庁編 昭和56 P.53～54

(鹿田分館 参考調査係)

## 「18世紀－20世紀初頭フランス社会経済政治思想コレクション」 —— 昭和60年度大型コレクションについて

本 池 立

岡山大学附属図書館は、昨年度、文部省に大型図書の購入を申請して採択され、『フランス社会経済政治思想コレクション』を680万円で購入した。258件、385冊を収めた文字通り大型図書である。以下、このコレクションの概要を説明しておこう。

このコレクションに収められた図書は、経済学、哲学、社会学、歴史学など多様な分野にわたっている。経済学については、デュパン、セー、レボア、ジッド、バステリア、ルローボリュウ、哲学については、マブリー、クザン、ベルグソン、社会学については、コント、ブグレ、歴史学については、ステルン、ティエール、トックヴィル、ルイ・ブラン、オゼール、ルヴァスール、などの著書が見られる。このように一瞥してわかるとおり、20世紀の著作、18世紀の著作（マブリ、ミラボー、ネッケル、サン・ジュスト、ルソー、ヴォルテールなど主としてフランス革命史に関連する社会思想の著作）も含まれているものの、図書の多くは19世紀フランスの主要な著作によって占められていること、そしてそれらを含めてすべての図書がオリジナルである点にこのコレクションの一つの特色がある。

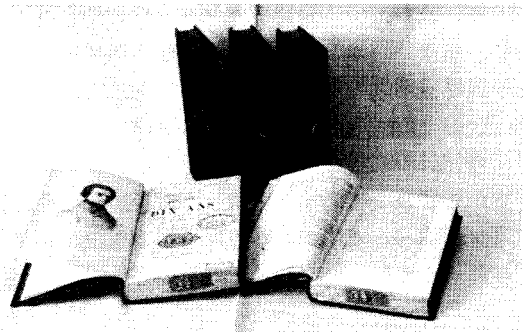
19世紀フランスは、フランス革命と第一次世界大戦にはさまれ、産業発展と都市化を背景にして、七月革命や二月革命、パリ・コミュンに揺れた激動の時代であった。そしてこの新しい状況は、多くの調査報告とともに、新しい学問やさまざまな思想を生み出した。19世紀フランスが「思想の実験室」と言われる由縁である。

このコレクションに含まれる調査報告としては、たとえば「3月18日蜂起に関する議会調査」と「1848年のフランスの労働者階級」（経済学者ブランキーの労働者調査）がある。前者は1871年のパリ・コミュンに関して、後者は二月革命の時期の労働者に関して、それぞれ貴重な歴史資料であ

る。他方、思想については、プルードン、カペー、ラファルグ、ゲード、ジョーレス、ラムネーなどの著作が収められている。とくにプルードンのものは13点も含まれていることを特記しておこう。これら共産主義・社会主義関係のほか、ナポレオンⅢ世の著作集やティエールの議会演説集がある。またブロックの「政治事典」とレオン・セーの「政治経済学新事典」がある。この両事典はともにフランス近代史研究にとって基本的な事典である。

以上のごとく、コレクションの資料価値はきわめて高い。ただし、ここに収められている図書の大多数は、一橋大学のメンガー文庫や小樽商科大学の手塚文庫で見ることのできるものである。しかし、これら図書がすでにわが国に存在するものであるとはいえ、それによってこのコレクションの価値が減殺されるわけではなからう。図書の稀少性は言うまでもないが、貴重な資料を身近に見ることができることによって、研究者は、たんに時間と経費の節約ができるだけでなく、図書をあれこれ直接に手にすることによって、研究意欲を刺激されることであろうし、研究の構想をふくらませ豊かにすることもできるであろう。ともあれこのようなコレクションがわが大学の図書館に備えられ、自由に利用できるようになったことは、まことに喜ばしいことである。

(もとといけ りつ 文学部 教授)



▲ ルイ・ブラン 十年史

## I・F・L・A 東京大会に参加して

I F L A (International Federation of Library Associations and Institutions = 国際図書館連盟) は、世界の図書館人に知識の交流、国際協力、図書館業務の統一を促進させ、かつ図書館人の目標を高めていく上での討論の場を提供するために1927年に創設されたものである。その第52回大会が東京大会の名の下に、メインテーマを「21世紀への図書館」と掲げ、8月24日～29日にかけて青山学院大学を主会場として開催された。はからずも、このうち27日までの会議に参加の機会が与えられたので、二、三の会議についての内容や、感想めいたものを記してみたい。

筆者が参加したのはいわゆる公開会議であり、それ以外は調査委員会(部会)、常任委員会(分科会)を主としたものであった。東京大会は加盟国120ヶ国の内62ヶ国より約2000名の参加登録があったようである。部会・分科会は同一時間帯に多いときは10箇所くらいで開かれており、参加者は各自関心のあるテーマを選択しながら会場を移動して自由に参加できるようになっている。各会議での報告レポートも、自分が参加した会議は勿論、それ以外の会議のレポートについても入手できたこと(5点までは無料)は、大いに役立った。

まず開会式であるが、既に各部会が開催されている日の午後、場所を国立劇場に移して、皇太子殿下、妃殿下の御臨席の下に行われた。挨拶の中で H. P. Geh I F L A 会長は格調高く「図書館は情報を収集して提供するという現在の役割から情報を生産し処理する場として発展してゆくべきであること」を謳い上げ、また、第三世界の図書館振興のための援助を熱っぽく語り、新しいプログラム「図書の保存と保護」に I F L A としても重点を置いていることを述べている。続いて行われた全体会議での、(1)「学術情報システム—統合化された情報ユーティリティへの挑戦(猪瀬博)」では、我が国の学術情報センター構想の目標、現状、および将来を紹介し、(2)「図書館情報の分野における南北の対話:21世紀を目前に考えたこと(Hedwing Anuar)」では、シンガポール国立図書館員の立場から、実際には南同士の対話のほうがまず重要であると力説し、最後に「技術的優位が政治的、文化的あるいは情報の優位にとって替わることを当然のこととしないように注意が払

われなくてはならない」(T. T. Suprenant)、「北の国にも南の国にも双方の利益のために対話の道を開き続け、相互依存を認識し合うことが肝要である」と結んだことに、日本の図書館界の役割を問われたことを強く感じた。(3)「図書館と時間(Yu Guangyuan)」では、図書館が時代の進歩と共に成長し、また今後も各時代の要請に応じ、進歩に貢献しなければならない旨を中国図書館界の2000年の歴史の中で述べられたことに、さすがその雄大さを感じた次第である。

先に記した I F L A の新しいプログラムの一つである「図書の保存と保護」に関する会議にも参加したのだが、調査図書館部会では各国の図書館が現実の問題として抱えているであろう「資料の修復と保存」がテーマで、例えば一保存環境条件の問題、虫害対策、頻繁な複写による破損(Xerox Corpses)、機器類によって記録されたもののその保存技術の問題、保存のための新しい技術として、中性紙の製造開発、既存の酸性紙の脱酸処理、および現資料を強化するシステムの開発など、我が国では長い間、和紙文化に慣れてきたせい、最近になって漸く深刻な問題として話題になってきた話であったので非常に興味深く聞くことが出来た。この報告に対して、何を、どのような方法で、どのくらいの経費でといった保存計画の立案の必要性も勧告の中に盛り込むべきでないのかとの質問もあり、今後我が国でも、分担収集・保存の問題とも併せて考えてゆくべき大きな問題として感じられた。保存分科会Ⅱでもやはり同様な問題が提示され、用紙の劣化現象について、今後は図書館の対応だけでなく、出版業者、製紙業者との協力を得ながら考えてゆくものとして、外国での実例を出しながら報告されていた。また図書館内に植物を持ち込むことも害虫発生につながるという報告もあり、様々な視点から保存についての環境づくりがいかに大切かを痛感した。

参加してみたい分科会が沢山あったものの、同時進行のためにままならず、残念だと思いつつも一方では数多くの中から選択できる喜びを感じる事が出来た。国が違っても、方法が異なっても、図書館業務という共通の認識を持ちながら、この大会に参加できたことは大変有意義であったように思う。

(石田 常重 鹿田分館 受入係長)

## 相互協力係

相互協力係とは、一体どこにあって、どのような業務を行っているのか、いまだにご存知ない方が多いのではないのでしょうか。以下、簡単ですがご説明いたします。

まず、図書館正面に入って、右手の貸出しカウンターを通り過ぎた左手にある文献複写室が相互協力係である、と言った方が分かり易いかと思います。

この相互協力係は、昭和58年4月1日、機構改革に伴って新設された係であります。従前の参考調査係の業務分野であったものを年々増加する利用者数に一係では処理し難い事情と、事務処理のスピードアップ、利用者サービスの向上のため、機構改革を機に二分割したものです。ですから、参考調査係とは事務処理上、密接な関連性をもっていません。

相互協力係は、次に述べるような業務を行っています。

### 1. 複写等依頼業務

今日の学問領域の多様化、複雑化は、高度情報社会ともあいまって当然に研究資料の増大化を促しています。ですから、岡山大学においても附属図書館、もしくは各分館に所蔵する専門雑誌等の文献のみでは十分な研究資料とはなり得ないのであり、この現象は他大学にとっても、同様のことであります。そこで、図書館としては資料収集の手段として、国内の国公立大学、国立国会図書館を始め民間研究機関等、ひいては国外の大学、研究機関等とも相互協力体制を確立して、利用者のニーズに極力答えるべく誠心誠意のサービスを行っているのです。

具体的には、昭和54年の「国立大学等図書館相互における文献複写業務取扱要領」によって、国立大学間では統一された複写業務体制になっています。そして、図書の相互貸借、公私立大学及び、民間研究機関との間では、各々の利用規程に添った依頼を行っています。また、国外への依頼はB

L L D様式(※)か、もしくは、I F L A様式(※)によって図書、マイクロフィルム等の貸借、そして、文献複写の依頼を行っています。

### 2. 複写等受付業務

上記の依頼業務に並行して、複写等の受付業務があります。すなわち、他大学や、研究機関等による岡山大学に対する文献資料の依頼です。

一口に受付業務と言っても、①他大学等からの郵送によるもの、②学内外の学生、教官、その他、一般学者等による直接来館しての複写受付(この場合はセルフサービス)等に分かれ、①の場合は、必ずしも、欲する文献が図書館内に所蔵してあるとは限らず、各学部の資料室や、研究室に行き、文献の資料を入手し、複写、及び貸出しを行っています。

上記業務は、電子複写機3台、マイクロリーダープリンタ1台、フィッシュフィルム撮影機1台を置き利用者のサービスに供しています。

以上、おおまかに相互協力係の業務内容を主にサービス面から紹介した訳ですが、ただ、図書館におけるサービス部門の一係としては歴史も浅く、利用者に対するサービスが十分でない面もありますが、近い将来、電算機による事務処理のトータルシステム化、技術革新による複写機械の性能アップ等により、現在よりも資料入手の迅速化を計ることができると考えています。

利用者の皆様方と共に、より一層の充実を図るべく努力しておりますので、お気付きの点を係までお寄せ下さい。

※ B L L D ; British Library Lending Division の略。英国国立図書館貸出し部門のこと。この機関への依頼は、予め所定の申込書に複写希望頁数に比例したクーポンを添付することになっている。クーポン1枚の値段は1250円(昭和61年12月現在)

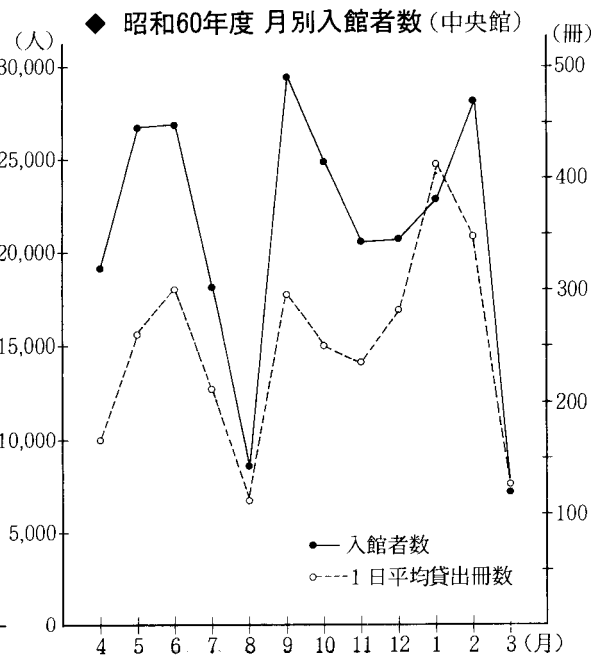
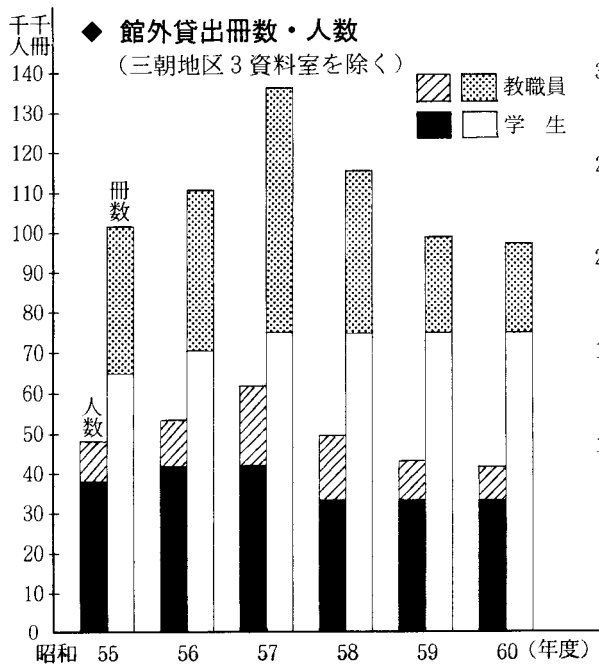
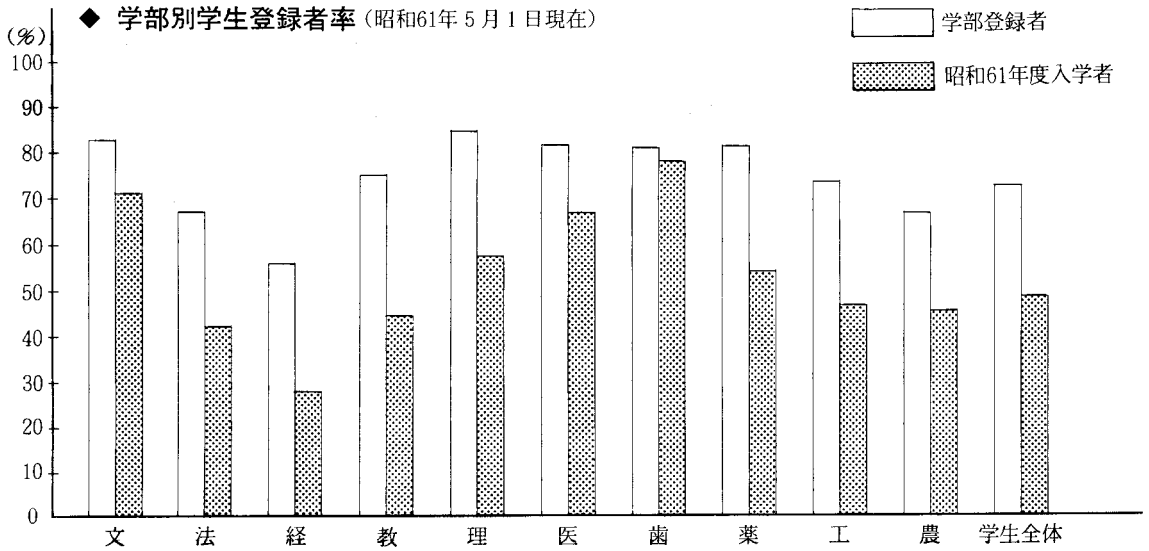
※ I F L A ; International Federation of Library Associations and Institutions の略。国際図書館協会連盟のこと。1975年に制定された3枚綴りの申込書によって依頼する。

### ◆ 学生の皆さんへ ◆

#### 学生希望図書制度のお知らせ

是非読みたい本や学習に必要な資料が図書館に無いとき、皆さんはどうしていますか?仕方ないと諦めてしまいますか?こうした場合、図書館では学生希望図書制度を設けています。手続きは簡単です。学生希望図書申込用紙に必要事項を記入して、貸出カウンターに提出するか、閲覧室に設けてある投書箱に投函して下さい。希望の資料は図書館資料選択委員会で選考の後、購入手続がとられます。購入の決定した本は随時貸出カウンター周辺に掲示されますので注意して御覧下さい。

# 図書館統計



## 日誌

- 61. 4. 17 ~ 18 第34回中国・四国地区大学図書館協議会総会 (於 徳島東急イン)
- 61. 4. 24 昭和61年度 (第1回) 附属図書館運営委員会
- 61. 5. 21 昭和61年度国立大学附属図書館事務部課長会議 (於 東京医科歯科大学)
- 61. 6. 11 ~ 12 第33回 (昭和61年度) 国立大学図書館協議会総会 (於 東京医科歯科大学)
- 61. 6. 26 昭和61年度 (第1回) 池田家文庫等特殊文庫委員会
- 61. 7. 15 昭和61年度 (第2回) 附属図書館運営委員会
- 61. 11. 12 ~ 14 第27回中国・四国地区大学図書館研究集会 (於 岡山まきび会館)

<カット> 農学部教授 奥 八郎 <題字> 附属図書館長 久留島 陽三